

連載最終記事「小学校英語活動の今後は」#20
掲載を終えての感想 (2011.3.31)

■連載初回掲載が、2009年4月9日でした。2008年10月から新井小英語活動アドバイザーとして、当時の5、6年生対象に教案作り、学級担任、ALTを絡めながら私が信じる児童英語学習理念を展開する貴重な機会をえました。お陰さまで、この奉仕活動も2年余り経った今日で終了しました。■新井小での活動の機会を与えて下さった古澤校長始め、この活動記録を連載記事として取り上げて下さった上越タイムス妙高支局長の関原様に謹んでお礼申し上げます。■教育者が10名いれば文字通り十人十色 (So many men, so many minds.)というだけあって、学級担任が英語教育の素人であっても、公教育の実践者として大きなプライドがあり、また、教育委員会もしかり、それを指導する指導主事、教育長、更にはその助言者的立場の上教大H教授…といった具合に私の実践は俎板の鯉のごとく、良くも悪くも批評・批判の矢面に立たされた得難く、面白い2年余りでした。■私の英語教育理念は、LLシホヤ新井教室のそれと同じく、「**使える英語力を身につけるために、英語でイキイキパワーを育みます。**」です。子供たちがいずれ英語で何かを表現しようとする時、他人を巻き込んだなかでの豊かな自己実現 (私は、これを「自灯明」と名付けています。) を目指すことになってほしいです。■文科省の言う「英語学習の素地を作りたい」の中身を「英語ノート」とそのマニュアルを熟読するにつけ、そのぬるま湯加減に驚くばかりです。■楽しくなければ力が付かないことは真理なのですが、巨視的に観て、楽しいだけでは「力=使える英語力」は決してつかないのは、英語だけにとどまりません。国語力、社会常識、日本の文化、理科、算数…ありとあらゆる素養習得を絡めながら、器にすぎない道具としての英語力を磨く、生活年齢に合ったカリキュラムが必要です。曲がりなりにも実質1年半、新井小を舞台とした「**化け物のような、又工的巨大組織**」を相手に精進させて頂けたことは、生涯の忘れえぬ思い出になりました。■古澤校長は、教委と私との狭間に立ち、良く調整して下さいましたが、2010年度の途中、校長会からの批判をかわすことができず、結果として、竜頭蛇尾となり、2010年度後半の私は、アドバイザーの肩書だけとなって、実践の機会を奪われてしまったことは、悔しくないと言えば嘘になります。しかし、古澤校長は、今思えば、巨大な公組織のしがらみの中で、よくぞ民間の名もない私を使ったものだと、皮肉ではなく、その勇気に敬服しています。■嬉しい事に、私と触れ合った学級担任の中から1教諭のように私の考えに賛同し、「英語で仲間づくり」の**M-PEC**にも入会されて、市民向けのM-PEC Festivalの英語劇で2回も配役として社会貢献なされた御仁もいらっしゃいます。■今回の最終記事は、公教育の英語教育対処について、かなり痛烈に批判してございます。LLシホヤ新井教室講師歴37年目の感想として、ここに記録いたします。終わりに、私をいつも精神面で支えて下さっておられる橋口教授のお口癖：「謙虚に精進を！」を噛みしめながら、新たな出発を致します。関係者の皆様様にお礼申し上げます。

遠藤由明 拝



遠藤 由明
達します。
すべての英文はたつた五つの文型に当てはまります。この構成要素はS主語、V動詞、C補語、O目的語の四つだけです。一文中、つ「等時性」によって発音も良くなり、ネイティブの発音も聞き取りやすくなります。小学校英語指導の水面下で留意すべきはこの二つです。

教えながら学ぶ指導者に

これ以外はすべてA d副詞語句なのです。つまり、S、V、C、Q、A dそれぞれを塊を発見させるように指導すれば「意味群」の発見が容易になり、か

「聞き話」読み「書く」四技能の最上位は発話の土台の上に位置する作文力です。学級担任(CR T)は四技能を高めていく過程で子どもの生

活年齢にあった題材を選ぶ、常に発話を促すようにしてほしいのです。そして毎回のレッスンの最後は、子どもたちから自発的な口頭作文が出るような指導案を作してほしいのです。

拙い連載：#1~20は、www.shihoya.com の、目次「上越タイムス連載」にございます。ご覧下されば光栄です。